

超簡単な仏教入門

はじめに

仏教はお釈迦様によって開かれました。お釈迦様はインドの人です。インド人は合理的です。ですから仏教は合理的です。仏教が合理的でなく見えるのであればそれは仏教であるのか疑ってかかる必要があります。

合理的なものは簡単です。たとえ複雑に見えても少数の原理、原則の組み合わせにすぎません。

仏教の原理原則とは空と中の概念です。お釈迦様から大乘仏教の創始者ナーガールジュナ（龍樹）、現在の大乘仏教諸派に共通する原理・原則はその2つだけです。その他のことは仏教の本質とは関係ありません。

この空と中の概念は現代哲学の構造主義とポスト構造主義の概念にそのまま相当します。東洋思想である仏教の根本と西洋哲学の終着点である現代哲学が同じものであるわけです。

現代哲学は現在の人文・社会科学だけではなく数学や自然科学と技術の基礎です。仏教と現代哲学は人類の到達した同じ終着点です。現代哲学を習得するとこと仏教の根本を理解することは道義です。現代において何か真理みたいなことを知りたいと思えば仏教を理解すれば十分です。

現代においては簡単とは短く短時間で理解できることであるべきです。中と空をいかに簡単に理解できるか、これが現代仏教の課題であるべきはずのことです。本書では中と空を極少かつ分かりやすく説明します。

序論 般若心経

般若心経と言われるお経は

色即是空 空即是色
色不異空 空不異色

有名な般若心経の一節です。

「色は空でもあり、空は色でもある。色は空と異ならない、空は色と異ならない」と読めます。

これは仏教の「中」を表しています。中とは中観とも言います。「色を空とも見ることができる、空を色とも見ることができる」「色と見ることは空と見ることに矛盾しない、空と見ることは色と見ることに矛盾しない」ということを表しています。

物事を空と見ることを空論といい、物事を色と見ることを戲論（あるいは仮論）とい

います。有名な上記の文句は「物事は2つの見方で同時に見ることができる。空論で見ること
もできるし、戯論で見ることできる」ということを表しています。この考え方を中論、
あるいは中観論といいます。

なぜこういうことを言いたかったのか？

例えばこの章句をそれぞれ否定してみましょう。

色即是非空 空即是非色

色異空 空異色

のような形になります。これは「色は空ではない、空は色ではない。色と空は異なる、空と
式は異なる」となります。これは「空論と戯論は両立しない」という意味にも受け取れます。

空論は人類における一大発明でこれを理解すると戯論を否定して空論のほうが正しい、
という考え方に陥りがちです。

空論を最初に想像したのはお釈迦様です。お釈迦様が菩提樹の下で最初に悟った内容は
空論です。この時点では中観論に対する記載が仏典になくお釈迦様が中観論を理解してい
たのかどうかは分かりません。この時点より後の経典を見てもお釈迦様が中観論を理解し
ていたのかどうかははっきりしません。お釈迦様が説いたのは「中道」という考え方ですが
それが中観論と同じものと思われませんがはっきりしません。はっきり中観論を説いたのは
大乘仏教の第一祖ナーガールジュナ（龍樹）です。

空論は斬新な考え方でこれを理解したり思いつくと戯論を否定してしまいがちです。現
代哲学では空論は構造主義に相当しますが構造主義がブームだった時には戯論と大体同じ
内容である実在論や素朴実在論、モダニズムの哲学を否定する動きが起きました。

空論と戯論は本来どちらかが成り立てばどちらかは成り立たないという背反の関係では
ありません。どっちも成り立つ場合もあるし、どちらかだけが成り立ち他方は成り立たない
場合もあるし、どちらも成り立たない場合もあるという独立の関係でとらえるべき理論で
す。

空論や構造主義のセンセーショナルさに惑わされて空論や構造主義の絶対化から相対化
に進むにはやや時間がかかる傾向があるようです。

では中観論や現代哲学で中観論に相当するポスト構造主義で相対化される空論や戯論
(現代哲学では構造主義や素朴実在論)とは何でしょうか。

第2章 お釈迦様とデカルトの悟り

空論を理解するために人類の偉大なる2つの悟り、お釈迦様の悟りとデカルトの悟りを
比較してみます。

- ・デカルトの素朴実在論

デカルトは事物の存在の確実さと存在する事物に対する認識の正しさを追求し、“cogito ergo sum（我考える、故に我あり）”という答えに行きつきました。これは仏教の戯論と哲学における素朴実在論の典型的な例になります。ここで短く西洋哲学について説明します。西洋哲学は事物の存在と認識の正しさや確かさについて研究する学問です。ですので西洋哲学は存在論と認識論から成り立ちます。実在論という言葉を使いましたが中世の神学では実在論とはイデアが実在するという理論でした。イデアとは事物の本質という意味で事物自体は本質ではないという前提が背景にあります。それと区別して素朴実在論とは事物は確実に存在するし、人間は存在する事物をありのままに正しく認識できるという考え方です。これは時代や場所を問わず大人が普通に持っている考え方で意識するしないに関わらず当たり前のこととされています。デカルトはこの当たり前のことを裏付ける考え方として“我考える、故に我あり”に到達しました。言い換えると素朴実在論を正当化し絶対化するための考え方です。

この言葉を分析します。デカルトはまず自分が存在することの根拠を自分が自分自身を認識できることに置きました。自分がリアリティをもって自分の自我を感じられるので自分が実際に存在することは間違いないと考えました。そして人間は自分自身をありのままに正確に認識できるとデカルトは考えます。少なくとも自分自身については素朴実在論は成り立つと考えます。そこからさらに発展させて全ての認識されるものは実際に存在しているから認識されるのだし、その実在するものに対する正確な認識も間違いなく行えると考えます。そして最後にそうした考え方の正しさを保証するのは「神が誠実だから」と考えます。ついでに要素還元的方法論、全体としては複雑でよく分からないものでも、部分に聞かして部分ごとに理解して元の通り組み立てなおせば全体も正確に理解できると考えます。このデカルトの考え方は近代哲学の原点とされます。確かに「神の誠実」という考え方が唐突に出てくる点を除いては素朴実在論的な感覚をよく説明した理論です。近代哲学のみならず近代の思想はこの素朴実在論を前提として成り立っておりモダニズムと呼ばれます。素朴実在論について繰り返しますと素朴実在論とは事物が確実に存在し人間には存在する事物をありのままに正確に認識する能力があるという考え方です。仏教では素朴実在論は戯論（仮論）と同じものです。

・菩提樹の下でお釈迦様の悟ったこと

西洋哲学のデカルトは存在論と認識論について考えましたが、お釈迦様が解決しようとした問題は自分がいかに苦しみから逃れられるかです。お釈迦様にとっては生きていることも苦しみでした。あるいは生きていていいこともあるかもしれませんが老いや病や死から完全に逃れることはできません。お釈迦様は永久に苦しみから逃れられる方法を考えました。死ねば苦しむことはないかというインドでは輪廻転生が信じられていて死んでもまた生まれ変わるのでやはり苦しみから完全に逃れられることはありません。

お釈迦様がこの問題を空の理論によって解決しました。輪廻転生は輪廻転生をする実体

を前提として成り立つ考え方です。実体とは例えば魂とか靈魂などで肉体は滅んでも魂や靈魂が輪廻転生を繰り返すと考えます。お釈迦様が悟ったのは「魂や靈魂は存在しない」ということです。輪廻転生する実体が存在しないとなると輪廻転生の考え方自体が成り立たなくなります。お釈迦様は輪廻転生をするもの、つまり人間（や生き物）とは何かについて考えました。ここでお釈迦様はデカルトのように人間を要素に分解して考えてみました。お釈迦様の分析では人間とは五蘊から成り立ちます。五蘊とは色（物質的要素）、受（感覚）、想（表象）、行（潜在意識）、識（意識）から成り立ちます。ではこの中で輪廻転生するのは何か？お釈迦様の考えではこの五蘊の何が欠けても人間ではありません。例えば死んだら肉体はなくなります。とすると色を除いた受、想、行、識のどれかが輪廻転生する実体なのか？もっと突き詰めると実体があるという前提は正しいのか？あらゆる可能性を場合分けして論理的に考えればこれらの疑問について検討しなければいけません。お釈迦様は論理的考察や瞑想による内省を通じて精神的要素である受、想、行、識を分析しました。その結果、五蘊のいずれも実体であるとは言えない、そもそも実体というものはなく五蘊のいずれも空である、魂も靈魂も存在しないし、そもそも人間自身が空である、という考え方に到達しました。これを五蘊皆空といいます。

すると次にでは我々が実体と思っているものは何なのか、なぜ我々は空を実体と勘違いしてしまうのか？という疑問が生じます。この疑問に答える理論を十二因縁生起、略して因縁といいます。無明より行が生じ、行より識が生じ、識より名色が生じ、名色より六処が生じ、六処より蝕が生じ、蝕より受が生じ、受より渴愛が生じ、渴愛より取が生じ、取より有が生じ、有より生が生じ、生より老病死が生じる、この生成の関係を十二因縁生起といいます。これによりお釈迦様は世の中の全ての事物を空として見ることができるようになりました。これは素朴実在論とは本質的に異なる見方であり空論といいます。

最初に返って輪廻転生する実体がないのですから輪廻転生というものは存在しない、つまり死んでも生まれ変わらないので死んだらおしまいである、つまり死により苦しみから逃れられることをお釈迦様は悟りました。これを輪廻転生の輪から逃れたという意味で解脱といいます。よく誤解される点としてお釈迦様は悟ったことで輪廻転生の輪から逃れることができたという解釈がありますがこれは誤解で、実際にはお釈迦様は輪廻転生自体が存在しないことを悟ったのです。ですからお釈迦様は苦から逃れるという自分の問題を解決したのでこのまま死んでもいいやと死んでしまおうとなされますが、自分が悟ったことを世の中に広めようと思っておして余生を布教に費やしました。

ここまで見てもお釈迦様はちょっと人類史上に他に見当たらないくらい天才だと思います。もちろん修行中にいろいろな学派の人々に学んで修行したことが記載されていますのでお釈迦様一人で一から全て築き上げたのではないのかもしれませんがそれでも洋の東西問わずちょっと比肩することのできない天才だと思います。

にもかかわらずお釈迦様の天才性はここで終わっていません。ここまででお釈迦様が悟ったのは空の理論、空論です。その後のお釈迦様の言行録を記した經典から察するにお釈迦

様は中、同じことですが中観の理論も悟っていたと考えられます。

・デカルトとお釈迦様の比較

デカルトの理論は素朴実在論の一つの形です。自然に人間が抱いている、あるいは発達の過程で身に付ける素朴実在論的感覚を正当化するために理論構築されています。

一方でお釈迦様は身についた素朴実在論とは全く異なる理論を構築しています。その空の理論はなぜ人間が素朴実在論を抱いてしまうのか、事物が確実に存在すると思うのか、事物が存在するとしてそれを正しく認識できると思うのか、までを完璧に説明しています。また実体や実在の代わりに空を置くことで素朴実在論に代わる合理的な存在論や認識論を構築することに成功しています。空論があれば素朴実在論はなくてもいいのです。ですから空論は素朴実在論批判に使用できます。実際に西洋哲学の歴史では近代より後の哲学、ニーチェのような現代までの過渡期の哲学や構造主義が素朴実在論をモダニズム批判という形で徹底的に批判しています。こうした過渡期以降の近代思想批判の哲学は空の理論と近縁な理論です。

しかし実際には素朴実在論も空論もどちらが正しいということも間違っているということもできません。どちらもただの理論に過ぎません。あるいは一つの説、または仮説に過ぎません。更には素朴実在論と空論は背反した理論ではなく独立した理論です。つまりどちらかを立てればどちらかが立たないということはありません。両方が同時に成り立つことも可能です。どちらかが正しくて他方を批判する道具にするという性質のものではありません。他方の理論を批判したところで特に自分の理論が正しいという根拠もないので虚しさしかありません。無理筋というか無理無論、それこそ空理空論で目糞鼻糞を笑うが如しです。

この点を整理するのが中論、中観論になります。

第3章 中と中観の理論

第2章までで空論をお釈迦様で戯論をデカルトの素朴実在論の例で説明しました。

後に大乘仏教の創始者ナーガールジュナ（龍樹）はお釈迦様の悟りの内容を抽出し空論と中観論としてまとめました。更に時代が下って中国仏教の中興の祖である天台智顛は中観論を中論とし、素朴実在論である戯論（または仮論）を加えた形で中論、空論、戯論の3つの理論からなる三諦論としてまとめられます。

空論と戯論は西洋哲学における存在論と認識論に関する2つの理論です。中論は空論も戯論もどちらかに偏ることなく両方の見方ができるようにせよ、という理論です。この理論もやはりお釈迦様が由来だと思われます。それはお釈迦様の中道の考え方です。どちらにも偏るなという考え方です。空はインパクトが大きく一度理解すると空論を絶対化し極端や過激に走りそうですが、どちらの考え方も絶対といえる根拠がなく仮説に過ぎず、更に両社

は背反ではなく両立させることが可能であることを説いています。

中論は西洋哲学におけるポスト構造主義の理論に相当します。ポスト構造主義はイデオロギーに関する相対主義でどんなイデオロギーもそれが正しく確かであるという客観的根拠はないという考え方です。客観的でなければ主観的にはあるイデオロギーを正しく確かであると個々人が思うのは勝手ですが、他人がそのイデオロギーを正しくも確かでもないと思うのは普通のことだということです。万人が正しく確かであるという根拠があればあるイデオロギーを絶対化できますがそのようなものは普通はないという事実を認めた考え方です。イデオロギーを世俗の生活に影響を及ぼすか及ぼさないかで区別するとポスト構造主義はイデオロギーについてのイデオロギーであって世俗の生活に影響を及ぼすものではありません。そのためメタイデオロギーと呼んで世俗の生活に影響を与えるイデオロギーと区別します。ポスト構造主義の立場から言えば全てのイデオロギーは絶対性はありません。相対的なものなので相対主義といわれます。中論も同じです。中論を受け入れるとイデオロギーというのはどれもただの選択肢でしかなくどれを選択するかは完全に自由です。選択する人間の主体性、自主性、自覚、メタ認知が重要視されます。中論はメタイデオロギーになる一方、空論や戯論は対象を考える際の2つの異なる考え方を提供してくれる一方で既に世の中にあるイデオロギーが空論に基づいて作られているか戯論に基づいて作られているのかを系統分類するのに役に立ちます。特に西洋哲学の分類に役に立ちます。

おわりに

空論、中観論はお釈迦様から現代の仏教各派を貫く仏教の根幹です。この2つがあれば他がどんなに仏教に見えなくても仏教といえますし、この2つがなければいかに見ても仏教のように見えようと仏教とは言えません。空論と中観論、もしくは三諦論以外の全てのは仏教では枝葉末節です。

例えば日蓮宗の日蓮は“天台智顛の三諦論と法華經に還れ”といました。この場合、「三諦論に還れ」はいいのですが「法華經に還れ」は枝葉末節です。この2つを並べていることで日蓮が悟っていたかがよく分からなくなってしまいます。法華經には本佛論というのがあり法華經を絡ませると胡散臭くなったり世俗性や政治色が出てしまいます。日蓮の時代の激動の時代背景を考えると行動する仏教者としてそのように自らの仏教を組み立てたのかもしれませんが、仏教としては純度が下がって不順になります。

空論と中観論の現代哲学との相同性を考えれば我々日本人は思想というものを日本本来の清明心や正直、誠の思想、武士道などを除けば仏教という形での空論と中観論から始まり現代思想という形での空論と中観論として受容してきました。始まりにして終わりであり始まりと終わりが同じ形で収斂しています。

過去の知識や学問が大量に集積し現在も爆発的に進歩している現代では空や中観の理解は時間がたつごとに容易になっています。数学や科学技術、特に情報の科学技術は現代哲学

のプロトタイプともいえる現代数学の申し子であるため社会全体が現代哲学＝仏教的になっています。

我々は悟りの世界、解脱の世界に、すなわち涅槃に生きているわけです。恵まれた環境の中でしかも仏教をマスターすれば現実応用により大きな利益も得られます。万人が幸せになる思想である仏教を多くの人々がマスターするように願います。

(文字数：7,082 字)